

# 法副詞 **surely** の使用域と機能について

鈴木大介

## 1. はじめに

本研究では、英語の法副詞である *surely* について、実際に使用された言葉を対象とし、その使用パターンや機能について記述を行う。*surely* は(1a, b)で表されるように、文副詞として用いられ、命題の真実性に対する話し手の態度を明示する。

- (1) a. He has *surely* made a mistake.  
b. You *surely* return it to her tomorrow. (Huddleston and Pullum 2002:767)

Huddleston and Pullum (2002)では、その可能性の度合い（蓋然性）に応じて、法副詞の領域が、(i)strong, (ii)quasi-strong, (iii)medium, (iv)weak の4つに分類されている。

- (2) i assuredly      certainly      clearly      definitely      incontestably  
indubitably      ineluctably      inescapably      manifestly      necessarily  
obviously      patently      plainly      **surely**      truly      unarguably  
unavoidably      undeniably      undoubtedly      unquestionably  
ii apparently      doubtless      evidently      presumably      seemingly  
iii arguably      likely      probably  
iv conceivably      maybe      perhaps      possibly  
(Huddleston and Pullum 2002:768)

*surely* については、可能性の度合いが一番強い領域である(2i)に分類されている。一方で、(2i-iv)に見られるように、法副詞には法助動詞とは異なり多数の表現が含まれており、実際には、使用されるジャンルや文中での生起位置も様々である。そこで本研究では、コーパスを用いて、同じくコーパス調査に基づいた Biber et al. (1999)と比較しながら、ジャンル毎の分布や文中での生起位置を調査する。さらに、法助動詞も同様に可能性の度合い（蓋然性）を表すことから法副詞の機能に関わる重要な要因であると考えられるため、法助動詞との共起関係についても分析を行う。

## 2. 先行研究

*surely* の意味・使用については、基本的には確信度に関わる意味をもたらすが、位置によって異なるとされる。Simon-Vandenberghe and Aijmer (2007)で、節頭の *surely* には、*but surely* というコロケーションが多いことが指摘されているが、以下の(3)がその例である。

(3) *But surely* from the point of view of the farmer it's it's all to do with the hard ecu and and the hard facts of of driving tractors across large field, isn't it? (Simon-Vandenberghe and Aijmer 2007: 137)

一方、文末の *surely* は同意を求める意味となり、また文中では *I surely did.* のように、認識的意味というより強調を表す意味になるとされている。同様に、Quirk et al. (1985)でも、(4)のような例は、真実性の強調とし、'truly, verily, indeed'の意味を表す際、認識的意味を失うと述べている。

(4) They will *surely* object to his intervention (Quirk et al. 1985: 584)

Downing (2001)では、*surely* を *fighting word* とし、議論のやりとりの中で有用な語として記述されている。同時に、人称代名詞や *there* といった主語との共起やその語順に着目し、*surely* の意味・機能を質的・量的に分析している。

次に、助動詞との共起については、いくつかの先行研究でそのパターンが言及されており、個別の法助動詞や法副詞についての研究も少なくない。共時的な観点からは、Greenbaum (1969), Halliday (1970), Lyons(1977), Coates (1983), Palmer (1990), Hoyer (1997)で分析・議論がなされており、共起パターンによる可能性の度合いについても検討が加えられている。具体的な法副詞に関しては、Tucker (2001), 山崎 (2001)で、助動詞との実際の共起関係が数量的に明らかにされている。Tucker (2001)では、COBUILD corpus から抽出したデータを基に、*possibly* と法助動詞との共起とその割合が記述されている。一方で、山崎 (2001)は COBUILD *Direct* の下位コーパスにより、*conceivably*, *possibly*, *perhaps*, *maybe* と法助動詞との共起数を示している。通時的研究には、Traugott and Dasher (2002), Shibasaki (2004)があり、共起関係の発達まで議論されている。Shibasaki (2009) では UVE-Corpus が用いられ、1500年から現代までの *may* と法副詞のパターンについて具体的に記述されている。

最後にジャンルや生起位置であるが、コーパス調査に基づく Biber et al. (1999)で、スタンスを表す副詞類<sup>1</sup> のジャンルについては、話し言葉が最も多く、その次には驚くべきことに学术论文で多く用いられるとの結果が示されている。生起位置に関しては、どのジャンル

---

<sup>1</sup> Biber et al. (1999)の言うスタンス副詞には、*no doubt*, *certainly*, *probably*, *I think*, *in fact*, *really*, *according to ...*, *mainly*, *generally*, *in my opinion*, *kind of*, *so to speak* 等の *epistemic adverbials* や、*unfortunately*, *to my surprise*, *hopefully* 等の *attitude adverbials*、さらに *frankly*, *honestly*, *truthfully*, *in short* 等の *style adverbials* が含まれる。

においても文中に生起している割合が多いことが指摘されている。

このように、*surely* を含む法副詞については、先行研究において理論的研究が進められ、全体的な傾向が示されている。しかし一方で、具体的なレベルで詳細に記述されている状況にあるとは言い難い。同一のコーパスに基づき、具体的な法副詞を個別に、また網羅的に扱った一貫性のある記述が必要である。以上の背景から、本研究では *surely* を扱い、複数の観点からコーパスに基づいた記述を行う。

### 3. データと分析手法

一億語の大規模コーパスである British National Corpus (BNC)<sup>2</sup> から、*surely* について、全 6032 例が検索できた。次に、文修飾として機能しているものを手作業で調べて抽出していくと、**5369** 例が得られた。<sup>3</sup> 本研究では、これをサンプルとして分析に用いる。

以下では、上記のサンプルを用いて、最初にジャンルの観点から *surely* が用いられるテキストの種類に着目し、ジャンル毎の頻度を調査すると同時に法副詞全体の場合と比較する。次に、言語内的要因を検討し、ジャンルとの関係も合わせて分析を行う。具体的には、*surely* が(i)節中のどの位置に生起しているか、(ii)同一の節の中で、どのような法助動詞とどのくらいの頻度で共起しているのかを調べる。

### 4. 結果と考察

最初に、*surely* が用いられるジャンルの分布について、以下の表 1 の調査結果が得られた。ただし、BNC の中で各ジャンルのサイズが

---

<sup>2</sup> 本研究では、Brigham Young University の Mark Davies により管理・運営されているフリーオンラインコーパスの BYU-BNC から収集したデータに基づいている。

<sup>3</sup> 語や句を修飾している場合や、*surely and steadily* (着実にしっかりと)、*slowly but surely* (ゆっくりだが着実に) という場合を除いた。

異なるので、ジャンル間での比較を可能にするため、100万語あたりの頻度に標準化した。<sup>4, 5, 6</sup>

表1 *surely* のジャンル別生起頻度

	生起数	100万語あたり
SPOKEN	570	57.21
FICTION	2009	<b><u>126.28</u></b>
NEWSPAPER	448	42.80
ACADEMIC	651	42.46
MISC	1691	37.92
計	5369	306.67

2節で見たように、Biber et al. (1999)が、スタンスを表す副詞類のジャンルについては、話し言葉が最も多く、その次には学術論文が多いとの結果を示している。この結果に対して、本調査における表1を見ると、他のジャンルに比べて小説での使用が最も多く、高頻度で使用されていることがわかる。その次に、一般的には最も多いと

<sup>4</sup> BYU-BNC では、ジャンルが SPOKEN, FICTION, MAGAZINE, NEWSPAPER, NON-ACAD, ACADEMIC, MISC のように7分類されているが、本稿では、以後の議論で先行研究と比較するために、MAGAZINE と NON-ACAD を MISC の範疇に加えて、SPOKEN, FICTION, NEWSPAPER, ACADEMIC, MISC の5つに分類し直している。

<sup>5</sup> 各ジャンルのサイズであるが、BYU-BNCによると、SPOKENが9,963,663語、FICTIONが15,909,312語、NEWSPAPERが10,466,422語、ACADEMICが15,331,668語、MISC (BYU-BNCでのMAGAZINEとNON-ACADを含む)が44,592,334語である。表1は、この各サイズの語数をもとに標準化を行った。

<sup>6</sup> BNC全体を調査したため、表1では話し言葉全体を表すSPOKENの結果を示しているが、SPOKENの下位分類であるCONVにおいても、生起数が175で、100万語あたりの語数が43.61という結果となり、他のジャンルにより近い結果となった。

されている会話での使用が続いている。このことは、個々の副詞によって、ジャンル毎の分布が異なるということを示唆しており、個別に法副詞を1つ1つ調査していく必要があると言える。

次に、法副詞の一般的な生起位置であるが、Biber et al. (1999)で「節中」に生起する割合が最も多いことが記述されているのに対し、*surely* は以下の表2のような結果となった。他の法副詞とは異なり、「節頭」に生起する割合が高いことがわかる。(5a-c)が各生起位置の例である。

表2 *surely* の生起位置別頻度

	生起数	%
initial	2863	<b><u>53.3</u></b>
medial	2275	42.4
final	231	4.3
計	5369	100.0

- (5) a. *Surely* it just means everybody against Christ?  
 b. And it is *surely* dying from cancer with dignity which requires bravery.  
 c. That should be high on your check-list, *surely*? (BNC)

続いて、より詳細な検討を行うため、ジャンル毎に考察を進めていく。スタンス副詞全体の生起位置については下の表3で示されている。2節で見たように、全てのジャンルにおいて「節中」に生起している割合が高いことが見てとれる。

表 3 スタンス副詞の生起位置のジャンル別分布

(Biber et al. (1999: 872)より抜粋)

	% in initial position	% in medial position	% in final position
CONV	●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●
FICT	●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●
NEWS	●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●
ACAD	●●●●●●	●●●●●●●●●●	●

●1つで5%を表す

上の表を踏まえ、本調査と比較していくと、*surely* のジャンル別の生起位置とその割合は、以下の図1のようになった。<sup>7</sup>

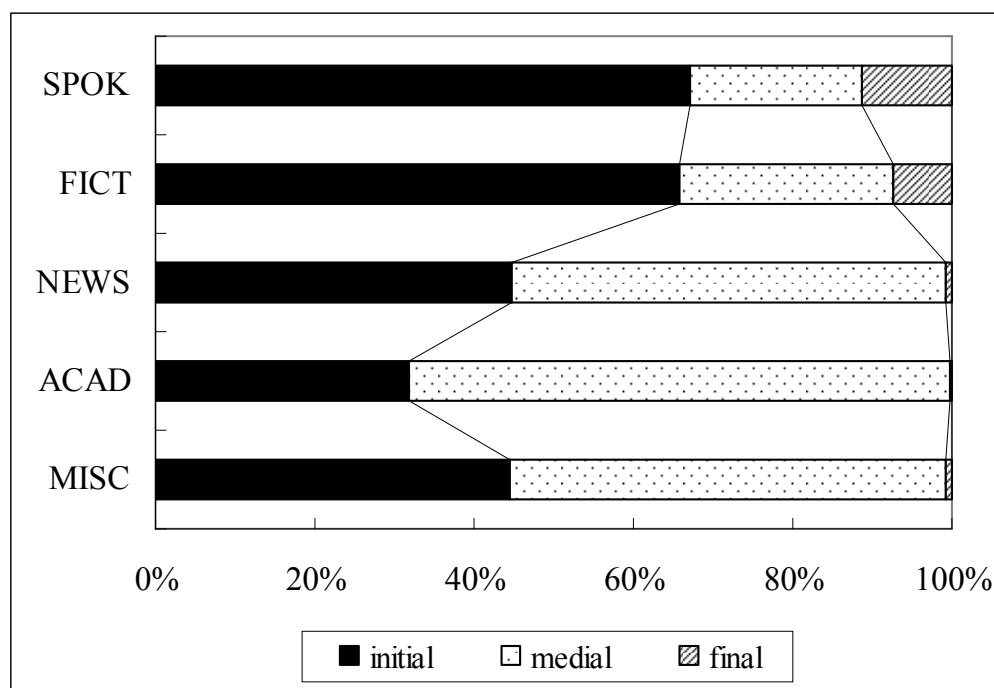


図 1 *surely* の生起位置のジャンル別分布

<sup>7</sup> 注 6 と同様に、SPOKEN の下位分類である CONV では、「節頭、節中、節末」の割合がそれぞれ 67.43, 12.00, 20.57 となり、SPOKEN 全体と比較すると、「節頭」では同じ割合で使用されている。一方、「節末」での頻度が高く、先行研究で述べられていたように、話し手と聞き手の間でのやりとりにおいて *surely* が効果的に使用されている可能性が高いと考えられる。

*surely* の「節末」での使用については、上の表 2 の法副詞全体の調査結果と全体的には同様の傾向を示していることがわかる。また、ジャンルに関係なく、「節頭」に生起する割合が高いことも明らかである。この点から、*surely* は「節頭」に生起し、節内容についての可能性の度合いを節の最初の位置で明示する傾向にあると言える。節の始まりの位置というのはトピック/主題を示す (cf. Halliday and Matthiessen 2004, Hoyo 1997, Thompson 1985, Halliday 1970) ことから、*surely* はモダリティというトピック/主題を表す機能を有している。次に、ジャンル間を比較すると、とりわけ顕著な点は、表 2 に見られるような法副詞全体の傾向と比較して、*surely* の場合は、会話と小説のジャンルにおいて、「節頭」に生起する割合が非常に高いということである。上述のジャンル別の生起頻度において、小説で最も使用頻度が高く、その次に会話が続いたことから、各ジャンルの生起頻度と「節頭」での使用割合との関連を指摘することができる。

最後に、観点を移して法助動詞との共起について見ていく。結果は、表 4 の通りになった。<sup>8</sup> (6a-c) は共起の例である。

---

<sup>8</sup> 各表現間において生起度数が異なっているため、同じ尺度で比較できるように、表にはそれぞれ生起度数の後に 1000 例あたりに標準化した頻度を示している。



表 4 共起する法助動詞の種類と頻度

	initial		medial		final		計	
	生起数	1000 例	生起数	1000 例	生起数	1000 例	生起数	1000 例
must	194	67.8	339	<u>149.0</u>	20	86.6	553	235.0
will	94	32.8	195	<u>85.7</u>	11	47.6	300	127.5
would	345	120.5	340	<u>149.5</u>	21	90.9	706	300.0
shall	4	1.4	6	2.6	0	0.0	10	4.2
should	145	50.6	52	22.9	8	34.6	205	87.1
can	189	<u>66.0</u>	79	34.7	23	<u>99.6</u>	291	123.7
could	187	<u>65.3</u>	48	21.1	12	<u>51.9</u>	247	105.0
may	1	0.3	6	2.6	0	0.0	7	3.0
might	8	2.7	0	0.0	0	0.0	8	3.4

- (6) a. The main reason for this **must surely** be related to the manner in which LDOCE definitions are constructed.
- b. This for Baldwin **would surely** have been the worst of both worlds.
- c. "*Surely* you **cannot** say that this is a happy marriage?" (BNC)

表 4 から、「節頭」「節末」に生起する *surely* は、比較的、様々な法助動詞と共起していることがわかる。<sup>9</sup> 一方で、「節中」の場合は、*must* や *will*, *would* といった可能性の度合い（蓋然性）が *strong* とされる法助動詞との共起が多く見られた。同じく強い蓋然性を表す

<sup>9</sup> 「節頭」や「節末」における *can*, *could* との共起例であるが、可能性を表す *cannot*（～はずがない）や力動的意味（～できる）がほとんどであった。一方、*can* は 212 例中 156 例 (73.6%) で、*could* は 199 例中 111 例 (55.8%) で主語に代名詞が用いられていた（全体は 48.4%であった）。疑問文の例も少なくなく、談話や話し手・聞き手とのやりとりの中で *can*, *could* と *surely* が共起して用いられていることがわかる。

*surely* に対応している通りの結果となった。以上から、「節中」においては前後の助動詞との組み合わせにより *surely* の蓋然性が固定されて使用されているが、「節頭」「節末」のように節の中心から外れ助動詞から離れることによって、幅広い蓋然性を表すようになると考えられる。

## 5. おわりに

本研究では、法副詞の一例として *surely* を扱ったが、ジャンルや生起位置の観点から、他の法副詞とは異なる傾向を示している事実を指摘し、節頭における談話機能を明らかにした。この点は、類義表現間の比較や法副詞全体の中での位置づけを調査する等、さらなる検討が必要である。また、法副詞と同様に命題内容についての可能性を明示する法助動詞との関係性についても具体的なレベルで記述を行い、生起位置によってそれらの共起パターンが異なることを示した。

## 参考文献

- Aijmer, K. (2009). "The pragmatics of adverbs", In Rohdenburg, G. and Schlüter, J. (eds.) *One Language, Two Grammars?: Differences between British and American English*, 324-340. Cambridge: Cambridge University Press.
- Andersen, G. (2001). *Pragmatic Markers and Sociolinguistic Variation: A Relevance-Theoretic Approach to the Language of Adolescents*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Bäcklund, I. (1986). "Beat until Stiff. Conjunction-headed Abbreviated Clauses in Spoken and Written English", In Tottie, G and Bäcklund, I. (eds.) *English in Speech and Writing: A Symposium*, 41-55. Stockholm: Almqvist and Wiksell International.

- Biber, D., Conrad, S. and Reppen, R. (1998). *Corpus Linguistics: Investigating Language Structure and Use*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Biber, D., Johansson, S., Leech, S. and Conrad, S. (1999). *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Harlow: Pearson.
- Blakemore, D. (1987). *Semantic Constraints on Relevance*. Oxford: Blackwell.
- Brinton, L. J. (1996). *Pragmatic Markers in English: Grammaticalization and Discourse Functions*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Chafe, W. (1994). *Discourse Consciousness and Time*. Chicago: University of Chicago Press.
- Coates, J. (1983). *The Semantics of the Modal Auxiliaries*. London: Croom Helm.
- Conrad, S. and Biber, D. (2000). "Adverbial Marking of Stance in Speech and Writing", In Hunston, S. and Thompson, G. (eds.) *Evaluation in Text: Authorial Stance and the Construction of Discourse*, 56-73. Oxford: Oxford University Press.
- Declerck, R. (1991). *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha.
- Dixon, R. M. W. (2005). *A Semantic Approach to English Grammar*, 2nd ed. Oxford: Oxford University Press.
- Downing, A. (2001). "'Surely You Knew!' *Surely* as a Marker of Evidentiality and Stance", *Functions of Language* 8 (2), 253-285.
- Egins, S. (2004). *An Introduction to Systemic Functional Linguistics*, 2nd ed. London: Continuum.
- Fraser, B. (1990). "An Approach to Discourse Markers?", *Journal of Pragmatics* 14, 383-395.
- Fraser, B. (1999). "What Are Discourse Markers?", *Journal of Pragmatics* 31 (7), 931-952.
- Fowler, H. W. (1998). *Fowler's Modern English Usage*, 3rd ed. Revised by R. W.

- Burchfield. Oxford: Oxford University Press.
- Greenbaum, S. (1969). *Studies in English Adverbial Usage*. London: Longman.
- Halliday, M. A. K. (1970). "Functional Diversity in Language as Seen from a Consideration of Modality and Mood in English", *Foundations of Language* 6, 322-361.
- Halliday, M. A. K. and Matthiessen, C. M. I. M. (2004). *An Introduction to Functional Grammar*, 3rd ed. London: Arnold.
- Halliday, M. A. K. and Hasan, R. (1976). *Cohesion in English*. London: Longman.
- 林宅男 (編) (2008). 『談話分析のアプローチ—理論と実践—』 東京：研究社.
- Hoye, L. (1997). *Adverbs and Modality in English*. London: Longman.
- Huddleston, R. and Pullum, G. K. (2002). *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 井上永幸 (2001). 「コーパスに基づく英語シノニム研究 —happen と take place の場合—」『英語語法文法研究』 8, 37-53.
- 葛西清蔵 (1998). 『心的態度の英語学』 東京：リーベル出版.
- 小西友七 (編) (1989). 『英語基本形容詞・副詞辞典』 東京：研究社.
- 小西友七 (編) (2006). 『現代英語語法辞典』 東京：三省堂.
- Leech, G. (2004). *Meaning and the English Verb*, 3rd ed. Harlow: Pearson.
- Lyons, J. (1977). *Semantics, Volume 2*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Palmer, F. R. (1990). *Modality and the English Modals*, 2nd ed. London: Longman.
- Palmer, F. R. (2001). *Mood and Modality*, 2nd ed. Cambridge: Cambridge University Press.
- Perkins, M. R. (1983). *Modal Expressions in English*. London: Frances Pinter.
- Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G., and Svartvik, J. (1985). *A Comprehensive*

- Grammar of the English Language*. London: Longman.
- 齊藤俊雄・中村純作・赤野一郎（編）（2005）.『英語コーパス言語学－基礎と実践』改訂新版. 東京：研究社.
- 澤田治美（2006）.『モダリティ』東京：開拓社.
- Schiffrin, D. (1987). *Discourse Markers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schiffrin, D. (2001). “Discourse Markers: Language, Meaning, and Context”, In Schiffrin, D., Tannen, D. and Hamilton, H. E. (eds.) *The Handbook of Discourse Analysis*, 54-75. Oxford: Blackwell.
- Shibasaki, R. (2004). “Patterns of Semantic Harmonization in English”, *Berkeley Linguistics Society* 29, 391-402.
- Shibasaki, R. (2009). “Another Look at the Development of Epistemic Meanings in English: A Historical Collocational Approach”, *Studies in Modern English* 25, 63-84.
- Simon-Vandenberg, A. and Aijmer, K. (2007). *The Semantic Field of Modal Certainty: A Corpus-Based Study of English Adverbs*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Swan, M. (2005). *Practical English Usage*, 3rd ed. Oxford: Oxford University Press.
- Sweetser, E. E. (1990). *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 龍城正明（編）（2006）.『ことばは生きている：選択体系機能言語学序説』東京：くろしお出版.
- Thompson, S. A. (1985). “Grammar and Written Discourse: Initial vs. Final Purpose Clauses in English”, *Text* 5(1-2), 55-84.
- Thompson, S. A. and Mulac, A. (1991). “The Discourse Conditions for the Use of

the Complementizer *That* in Conversational English”, *Journal of Pragmatics* 15, 237-251.

Traugott, E. C. (1989). “On the Rise of Epistemic Meanings in English”, *Language* 65, 31-55.

Traugott, E. C. and Dasher, R. B. (2002). *Regularity in Semantic Change*. Cambridge: Cambridge University Press.

山崎聡 (2001). 「文副詞の表す可能性の度合いと陳述緩和的助動詞との共起について」『英語語法文法研究』 8, 181-184.

### Appendix: 図 1

Appendix 1 *surely* の生起位置のジャンル別頻度

	initial(2863 例)	medial(2275 例)	final(231 例)	計
SPOK	383 (67.2%)	123 (21.6%)	64 (11.2%)	570 (100%)
FICT	1320 (65.7%)	541 (26.9%)	148 (7.4%)	2009 (100%)
NEWS	201 (44.9%)	244 (54.4%)	3 (0.7%)	448 (100%)
ACAD	208 (32.0%)	441 (67.7%)	2 (0.3%)	651 (100%)
MISC	751 (44.4%)	926 (54.8%)	14 (0.8%)	1691 (100%)